歳時記のある暮らし

二〇二一年《八月》

ひまわりの花が元気よく咲くころです。

皆様、おすこやかにお過ごしでしょうか。

いつも『神秘の健康力』をご愛用いただき、誠にありがとうございます。

大暑から始まる八月、強い高気圧に覆われ上空にきれいな青空が広がります。夕立に遭うこともありますが、それも夏の風物詩のひとつ。ジリジリと肌を焼きつけるような強烈な陽ざしに湿気の多い空気が暖められて入道雲が生まれ、真っ青な空を背景にむくむくと、まるで生きているかのように湧きあがり、街ごとのみ込まれそうな勢いで迫ってきます。小走りで軒先を求めて急いでいると、どこからかアスファルトの濡れたにおいが漂ってきます。雄大な自然との距離が縮まり「夏だなぁ」と思う瞬間です。

猛暑日や熱帯夜が続き昼夜を問わず身体に熱気がまとわりつくこの時期は、涼を求める感覚が冴えるものです。麦茶のグラスでカラカラとゆれる氷の音、ツルツルと喉越しのよいそうめんやざるそばの食感、かき氷やスイカを食べる時のシャクシャクとした音、風鈴の澄んだ音、青紅葉の葉擦れの音、川のせせらぎ…。この時期は五感で涼を求める風情があります。

あてなるもの　枕草子　第四十二段　清少納言

薄色に白龍衣（しらがさね）の汗衫（かざみ）。かりのこ。削り氷（ひ）にあまづら入れて新しき金鋺（かなまり）に入れたる。水晶の数珠。藤の花。梅の花に雪の降りかかりたる。いみじうつくしきちごの、いちごなど食ひたる。

「あて」とは、上品で美しい様子を示します。清少納言は、上品で雅やかなものは、薄紫色の袙（あこめ＝下着）の上に白い汗衫（かざみ＝薄い上着）を重ねた様子や、雁の卵。かき氷に甘葛のシロップをかけて新しい金属製のお椀に入れたもの。水晶の数珠。藤の花。梅の花に雪が降りかかっている様子。たいへん可愛い子どもが苺などを食べている様子、と述べています。千年も昔、平安貴族もかき氷を夏の素敵な食べ物として楽しんでいたようです。

清瀧や浪に散り込む青松葉（きよたきや なみにちりこむ あおまつば）　松尾芭蕉

（裏へ続きます）

勢いよく水しぶきをあげる滝の流れが風を起こし、松の青葉が吹かれて散り込んでいく様子が絵になり、詠んで涼を感じます。

八月七日からは立秋。立秋以降は残暑になるので、夏の挨拶状は「残暑見舞い」となります。やっと梅雨が明けて安定した天気が続くと思っていたらもう秋…、と思いがちですが実はこのころ、天空のロマンを堪能できる絶好の時期で、ペルセウス座流星群が現れ夜空は輝きを増します。月は出ていないのに、満天の星で明るく輝く夜空を「星月夜」といいます。

我ひとり鎌倉山を越え行けば星月夜こそうれしかりけれ

作者は藤原実成の娘で、平安後期に成立した『永久百首』に納められています。鎌倉山を越える夜道は心細かったが、満天の星はとてもきれいで嬉しかったと詠んでいます。

ペルセウス座流星群の流星の数が増えるのは八月中旬ごろ。流星群は彗星が撒き散らした氷や砂粒などの塵の帯と考えられ、地球がこの帯を通過する時、地球から見るとまるでペルセウス座から流星が降ってくるように見えるというわけです。宇宙に自分を置いて眺めてみると、宇宙の摂理の中で生きている気がして、また違う世界が広がります。

八月十三日から十六日の四日間はお盆。お盆には、七月に行われる新盆と八月に行われる旧盆があり、関西の人間にとっては、七月からスーパーなどにお盆用の干菓子のハスの葉などが並ぶと「早いなあ」と思うのですが、首都圏式に七月にお盆をする人も多いのでしょう。これだけ情報が発達していても東西の違いが残っていることから、文化の力強さを感じます。

お盆の期間の周辺には、広島や長崎の原爆の日、終戦の日、そして日本航空一二三便墜落事故の日もあり、命について考える時期となります。

寒蝉鳴（ひぐらしなく）。七十二候では八月十七日までの時候です。「カナカナカナ…」と甲高い鳴き声が夕暮れに消え入るように聞こえてきたら夏も終盤。八月二十三日の処暑を迎えると、朝晩の暑さがやわらぎ草むらの虫たちが鳴きはじめ秋の気配が感じられます。

熱中症にご用心いただき夏を元気にお過ごしください。

皆様のご健康をお祈り申しあげます。

金氏高麗人参株式会社
おもてなし係 お手紙担当 久郷直子